

## 「看護医療総合」 6月14日

### 関西国際大学伊藤尚子教授「災害看護・国際看護」



●今回の講義では災害看護、国際看護について学びました。病院で白衣を着てケアをする看護師とは少し違い、災害地や世界に自ら訪問し困っている人のケアにあたる看護師について知ることが出来ました。

今回の講義で1番印象に残った事は災害看護のお話の中に出てきた「皆が被災者」という言葉です。寝たきりの義母と介護をしているAさんという事案がありました。看護の対象と聞くと、寝たきりの義母へのケアに重きを置いてしまいがちですが、それだけでは不十分です。介護をしているAさんも被災者であり看護の対象であるためケアを行う必要がある。この話を聞いた際にハッとさせられました。怪我をしている人や病気の人など目に見えて被害が無い人でも災

害の影響を受けない人は居なくて、要支援者を支えている側にもケアの目を向けることが医療職の役目でもあるのです。またケアをする際、気を付けること、意識すべきことが沢山ありました。まず初めに行うべきこととして、声掛けや傾聴があります。しかし、声掛け一つ一つにも意味があり、不適切なものはかえって迷惑や傷つけてしまうことに繋がるため、責任をもって発言すべきであると感じました。傾聴は、話を聞くことですが相談に乗って優しい言葉をかける、聞きっぱなしにすることはあってはなりません。傾聴を通してアセスメントを行い、解決策を考えて解決に向けて実質的な援助を働きかける。その際に、本人の意思を確認して良かれと思ってということが無いようにする。など、ありとあらゆる事に気を配り、解決に向けて動くことが大切なのだ学びました。

●難民支援では、写真を見て世界の食糧危機や紛争の状況を目の当たりにしました。看護学とは実践の科学ということを知りました。感情的ではなく、論拠に基づいて行動します。親切心はボランティアで行うことだと分かりました。イラクでは看護師が足りておらず、看護師でないのに関わらず看護師の仕事をするため、感染が広がっています。伊藤さんが現地で医療支援を行なっていることを知り、尊敬と憧れを抱きました。なぜ世界で学校で地域で家庭で、迫害・虐待・いじめが繰り返されるのでしょうか。それは「異なる」ものへの恐れであり、自分の立場を脅かされる恐怖から、「優位」の確認をするためです。その抵抗として「看護」が必要です。食糧危機や迫害で苦しんでいる人々は私たちが幸せを確認するために存在しているわけではありません。保護される必要があり、幸せになる権利を有する人々です。世界や地域での災害医療をもっと学び、将来はその場で活躍できる人になりたいです。

●東日本大震災の際に行った宮城県南三陸町での支援の話を知りました。津波が酷く建物の3階の上に車がある写真や、元々住宅があった土地に生活用品が転がっている写真を見ました。被災された方の気持ちは思い計れないほどでした。被災地での看護は、避難所にいる人、いない人を含め一人ひとりへの細かいケアだそうです。被災された方への声掛けは、日常生活におけるニーズ充足度を把握するために「眠れていますか?」「ご飯は召し上がれていますか?」「お風呂は入れていますか?」等の日常生活での基本的な部分が行えているかを確認します。そこから、眠れていないのはなぜか、なにがあったら眠れるのかを考え支援をするそうです。また、患者の意思で何を必要としているのかを聞き、こちらの意思で勝手に行う事はしてはいけません。話を聞く上でこちらの得たい情報を聞き共感することが大切だそうです。このことから、私は被災地での看護では傾聴で、どれだけ相手の事を理解し、相手のニーズに応える方策を出すことが出来るかが必要だと考えました。

●テレビで難民支援の報道をされているのを見たことがあります。どのような人が難民と呼ばれているのか、どのような支援がされているのか疑問に思っていたからです。伊藤先生は、難民キャンプで住んでいる子ども達の健康調査を行ったり、国連で発言をしたり実際に現地に行って、ニーズ調査をして解決策を考え、現地の人と一緒に動き現地の能力を向上させるというプロジェクトを行ったそうです。支援だけではなく、その後も現地の人達だけで発展できるような支援はとても凄いと感銘を受けました。また、伊藤先生が仰っていた看護でよく耳にする「その人がその人らしく」とは、「自分自身で自分たらしめる」「ありがたい自分を生きる」ということがとても印象に残りました。今までの講義でも何度も「その人らしい在り方」というような言葉を聞いてきました。それは、自分で意思決定をすることや、生きたい人生を生きる事だと今回改めて学びました。

